

48 『看病用心鈔』成立の社会的背景

杉 田 暉 道

昨年の日本医史学会神奈川地方会九月の学術大会および日本医史学会関西支部十二月の秋季学術大会において、『看病用心鈔』は臨終行儀について述べたものであるが、看護についてもその手技や心構えが詳細に具体的に述べてあり、かつ医薬の使用の記述についても示唆されるものがあることを述べた。

今回は本鈔が成立した社会的背景について新知見を得たので報告する。従来は平安時代の後半から伝染病や種々の病気が蔓延し、精神的不安に陥るものが多くなつた。そしてこれらは人間の怨霊などによるたたり、すなわち「ものけ」によるという思想が滲透した。さらに各地方で頻繁する戦乱により、一層人心が不安となり、多くの民衆は現世利益を説く密教から人心は離れ、未来

の浄土を欣求^{ゴング}できる新しい宗教の興るのを熱望した。これに応えて登場したのが、法然、栄西、親鸞、道元、日蓮、一遍、叡尊などの祖師によって開かれた新興仏教であった。このような社会状況において本鈔が成立したと考えられていた。

そこで演者は、新興仏教と旧来の仏教との差異を、僧侶の活動について検討した結果、新興仏教では「個人の救済を最重要におき、非人救済、女人救済、勸進、葬式の活動を積極的に行っていたことがわかった。それでは何故旧来の仏教の僧侶達は前記の活動を行わなかったのか。彼らは、国家が指定した特定の寺院で受戒を行った僧侶で官僧といわれている。そして彼らは天皇に仕えることがもつとも重要な活動であったので、常に「清浄」であることが要求された。したがって、「穢れ」に関係する前記の活動は積極的に行うことができなかった。したがって死体に触れたり、改葬に携わつたために生ずる死穢が不可避である葬式に関与した場合、一定期間は鎮護国家の宗教儀式に参加したり、公的な所に向くことは慎まねばならなかった。

一方新興仏教を開いた祖師たちは、官僧の世界の在り方に不満を持ち、官僧の特権と制約から飛び出して新しい仏教を開いたのである。したがってこれらの僧侶を遁世僧と呼ぶ。たとえば法然は十五歳(一一四七年)の時延暦寺で授戒を受け官僧となったが、四三歳の時に遁世僧となつて新しく専修念仏を唱えた。

これらの遁世僧は非人救済については、自己を非人として位置づけ、すべてを捨てて乞食をしながら遍歴修行する「乞食法師」は彼らの理想であつた。それは仏教を開いたブツダの姿でもあつたからである。したがって遁世僧が非人救済を行うことは何ら問題はなかつた。女人救済については、女人不浄の思想から官僧は女人救済を行わなかつたが、遁世僧は官僧のような身分上の制約がなく、自由に考え、行動することができたので、女人救済を積極的に行つた。

葬式については、これを行うようになった遁世僧が出現したからであつて、死者の救済という点から考えて実に画期的なことであつた。叡尊教団の律僧たちは、「清浄の戒は汚染なし」という論理を考え出して穢れに関係あ

る活動に積極的に携わつた。念仏仏は「往生人に穢れなし」という論理を持ち、念仏者はすべて極楽往生ができるから死穢はないとした。したがって念仏僧は「穢れ」を気にすることなく、臨終者を看取り、さらに『看病用心鈔』を著わして庶民を指導したのである。

(神奈川県予防医学協会)